久坂玄瑞

戦前・戦後を通じて唯一の、史料にもとづく久坂玄瑞伝。巻末に“年表学者”としても知られる妻木忠太の、九十頁におよぶ詳細な「久坂玄瑞年譜」を付す

武田勘治著

付 久坂玄瑞年譜

マツノ書店

・十二月十七日　君、水戸に入り同藩岩間金平片岡爲之允住谷寅之助等に會晤す

・十二月十九日　君、書を桂小五郎に送り姉小路公知の囑せる大日本史を購求して送本せんことを請ふ

・十二月十九日　君、書を桂小五郎高杉晋作に送り水戸藩の内情を報じ二人の速に上京を望み吉田寅次郎遺骸を若林に改葬せんとするを告ぐ

・十二月二十日　君、水戸を發し二十二日太田に泊す

・十二月二十三日　君、高山彦九郎の墓に展し高崎宿掛を經て二十七日上田に至り松代藩櫻井純藏恒川才八郎に會し同藩佐久間象山を訪ふ

十二月二十三日　勅使三條實美副使姉小路公知京都に歸り二十五日參内復命す

十二月二十八日　藩世子京都に歸着す

・十二月晦日　君及び山縣半藏書を齋田公輔來島又兵衛に送り佐久間象山に面晤したるも我が招聘に應ぜざるを報じ兵制城堡砲艦等の學識に卓越せるを報ず

・十二月晦日　佐久間象山書を君及び山縣半藏に送り櫻賦の詩作と將戊午報國の著書とを携へ去らしむ

○文久三年癸亥　二十四歳

正月二日　藩主藩世子と共に歸藩せんとして其願許を奏請す七日朝廷藩主の請を許し藩世子をしてなほ滯京せしめ給ふ

正月三日　藩世子參内して龍顏を拜し天盃を賜はるまた國事周旋の勞を賞して特に御衣一襲を賜はる

正月五日　高杉晋作伊藤俊輔山尾庸三等其師吉田寅次郎處士報三樹三郎元鷹司家家士小林良典の各遺骸を小塚

■武田勘治著『久坂玄瑞』は、昭和十九年に道統社から発行されたものである。著者の武田勘治は明治三十年、大分県杵築市に生まれ、吉田松陰など勤皇家の伝記や、教育に関する著作を数多く発表している。

■久坂の評伝は、その絶大な人気にもかかわらず、きわめて少ない。いずれも昭和十年代に刊行されており、次の三冊である。

香川政一著『久坂玄瑞』（含英書院、昭和十四年）は物語調の伝記である。萩の郷土史家である香川は、地元の強みを発揮して多くのエピソードを集めているけれど、虚実の境がはっきりしないことが惜しまれる。

和田健爾著『久坂玄瑞の精神』（京文社書店、昭和十八年）は最初の久坂評伝である。しかし当時の時局を如実に反映し、戦意高揚をあおっている個所が非常に多く、今日では読むに堪えない。

このたび復刻される武田勘治著『久坂玄瑞』は、史料をもとに淡々と書き進められた、忠実な久坂玄瑞伝である。刊行から半世紀を経た今日なお復刻されて読みつがれる価値を持つ伝記といえよう。復刻に際してB6判の原本をA5判に拡大した。

■戦後のまとまった評伝としては、長文連『奇兵隊　死士久坂玄瑞』（三一書房、昭和四十年）と池田諭『高杉晋作・久坂玄瑞』（大和書房、昭和四十一年）が出たくらいである。いずれもユニークな視点での研究だが、武田の著作のように正面から久坂の生涯をとらえた伝記は今もって現れていない。

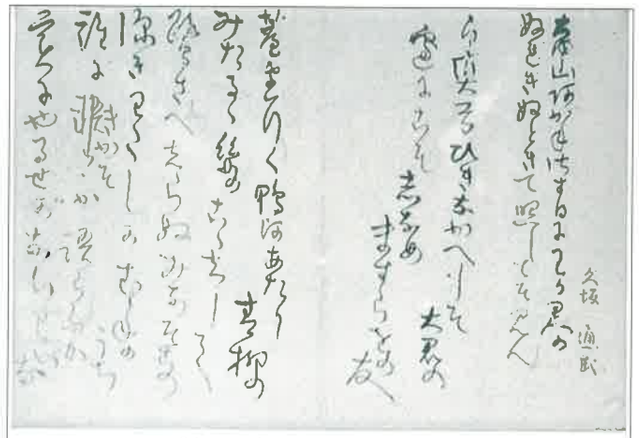
■付録の「久坂玄瑞年譜」は、数多くの維新志士の伝記を手がけ、防長史料の篤実な蒐集家として知られる妻木忠太編『久坂玄瑞遺文集』上巻からの転載。非常に密度の高い貴重な史料である。巻末には一坂太郎氏の解説「久坂玄瑞と関係文献」

■二著とも刊行されたのが終戦直前で、紙不足は極まり、印刷技術も低劣なのが惜しまれる。

今回はその分だけ頒価を下げているので、切にご了解を願いたい。

目次

一　序説
　久坂の生立
　①久坂の家
　②九州路の旅
二　吉田松陰と久坂
　①松陰と久坂の議論
　②松下村塾時代の久坂
三　久坂の東遊
四　西洋學所の諸生久坂
　①松陰の再獄と久坂
　②勤學と同志の指導
　③萬延元年
五　新鋭の闘士（再度の東遊）
　①再び江戸へ
　②活潑な運動開始
　③春嶽と和宮御降嫁との阻止運動
六　蹶起
　①失意の歸國
　②脱藩義擧の計畫
　③義擧の失敗
　④長井雅樂の幼公武合體論の排撃
　⑤久坂が妻へ與へた手紙
七　攘夷の魁
　①攘夷運動の推進
　②異人擊殺計畫
　③御楯組血盟
　④夷人館燒討
　⑤佐久間象山招聘の使
八　文久二年の活躍
　①京都の形勢と久坂の活動
　②長藩の攘夷實行と久坂
　③御親征運動と久坂
　④八・一八政變と久坂
　⑤長藩の言ひ分
　⑥久坂の逸話
九　元治元年
　①長藩の雪冤運動と久坂
　②長藩の出陣
　③禁門の變



『久坂玄瑞遺墨』（東行庵刊）より

■体　裁　A5判五二四頁
　並製箱入
■特　価　五千円（〒共）
■定　価　六千円（〒450）
■三点セット特価
　申込ハガキをご覧下さい
■特価締切　98年6月30日
■発　売　98年6月10日
▼僅少部数につき、品切れの際はご容赦願います。
▼書店には卸しません。
〒745 徳山市銀座2
☎〇八三四㉑二一九五
マツノ書店

……日朗の事この度の要件に御座候、奥々もよろしく御添書待ち奉り候。

天朝の盛、實に曠大の美事と存じ奉り候。（外交に關する　勅語の渙發をいふ）。小生「對策」（これは　乙夜の覽に入つた論文）此仁示され候やう申し置き候、例の御戒め（踏晦せよとの忠告）に負き、感激の餘り把筆立ちどころに就り申し候。……久坂生文才僕に長ずること數等、……土屋生（靄海）も、近日文を叙し教を乞ひ度しと申し居り候。……「東軒略稿」も來り候、朗詠擊節仕り候。

久坂はその時「森田節翁に呈す」七絶を賦した。

滿檐の春雨一燈寒し、談海防に及んで屢〻浩嘆す。老鰐ヒゲを揮はし瀾浪黑く、壯夫扼腕す膽心丹し。舌頭討賊すること吾れ何ぞ願はん、文氣神を泣かしめて君豈に安からんや。天下誰人か流涕せざる、幕謀姑息にして國威つく。

やがて久坂は備中に入り、後月郡ヤナ瀬村櫻谷の鄕校興讓館（今も西江原町にある興讓館中學の前身）に阪谷朗廬を訪れた。後東京で有名な學者となつたこの人（芳郎男の先代）は、同校の教授で、亡兄玄機の友人であり、それ故に亡兄の詩に次韻せんことを月性を介して依頼したりした。かういふヨシミで、後まで兩人は親しかつた。時に阪谷三十七歳。

山靜かに林亭嵐氣淸し、芳茶香酒、同盟を結ぶ。檐に花影淡く春雲動き、泉水色高うして驟雨鳴る。小酌或はかへつて、賓、主となる、交情何ぞ問はん熟（親昵）兼生（初對面）。妨げず閑話深夜に及ぶを、書劍明朝はまた遠征。

四、長井雅樂彈劾（公武合體論排撃）

これより先、藩主の參覲に從つて出府した長井雅樂は、幕閣がその周旋を歡迎するのに氣をよくして、幕府の希望を聞き、命によつて再び朝廷へ周旋すべく入京した。それは三月十日のこと。

然るに京都の形勢は前と全く違つてゐた。島津久光が大兵を率ゐて上京し、勤皇に力を致すと專ら評判で、反幕の志士が續々集りつゝあり、自然、朝廷當路の幕府に對する鼻息が荒くなつてゐた。殊に京攝の薩藩有志が長州の公武周旋を排擊するのであつた。そこで長井は、同藩の堀次郎（後の伊知地正治）や柴山愛一郎（寺田屋殉難者）等と會見し、久光上京の事情を聞いたけれども、彼等はソラ呆けて語らなかつた。そこへ藩の來島良藏が、薩藩の探索を了へ藩命によつて上京して來た。それに聞くと、今や開港論による周旋は非常に困難であるらしい。大阪に集つた志士等が「姦物長井を殺せ」と騷いでゐることも耳に入つた。

そこで長井は正親町三條卿や長井說の支持者岩倉具視公などに向つて、諸藩の壯士の跋扈を告げ、彼等の言を聽いて朝議を變更することのないやうに要請し、一方、來島や松門の時山直八（これも長井說贊成）を大阪へやり、岡藩の小河彌右衞門や薩藩の大島三右衞門（西鄕隆盛）等の意見を聽かせたが、志士等は一向眞意を語らなかつた。彼等は長井を九條家の奸臣島田左近の連累と目してゐたからである。

久坂は翌日馬關へ向つた。その地の狀況を視察し、また直ちに上京するのである。

十五日、久坂は馬關に着き、本陣白石方へ入つて高杉・入江等に會し、對岸小倉領の田の浦を借り入れる評議に與つた。小倉藩は幕府の布令に藉口して、長州の擊攘を傍觀してゐるので、そこを借りて兩岸から砲擊しようとするのである。外艦が田の浦側へ寄つて通過すれば、長州の幼稚な大砲では射程に入らないのだ。しかし小倉藩は彼等の要求に應じなかつた。で、再び本陣で會議して、この件については京都で運動することを約し、その夜久坂は直ちに東上した。

久坂のこの頃は、文字通りの東奔西走であつた。これ等の日に彼が萩の妻へ與へた手紙に曰く、

（四月二十五日、即ち三十餘人の同志を率ゐて西下した頃の手紙）

此内以來度々のおんふみ、たしかにうけとりまゐらせ候。一々御返じもいたさず、さぞ〳〵御あんもじと、すゐしまゐらせ候。……この度拙者共同志中三十六人、下のせき出張としておもむき候。昨夜とのみ（富海）につき候。この度は萩へもかへる事には不二相成一、いかにも情なきものとおもひ玉はるべく候へ共、おん國の御大事には引替へられ不レ申候。まことに多人數にて、こゝろつよき事、おもしろくいさましき事に候。なにも、のちの便に申し殘し置き候。……四月二十五日。

杉みなさまへ宜しくおんことわりなされ玉はるべく候。中井・玉木其外へも、おなじく賴み入り候。以上。

しら雪のたなびくくまは、あしがきの、ふりぬるさとのやどのあたりぞ

ふるさとの花さへ見ずに豐浦の、にひさきもり（新防人）と吾は來りけり